

撰論学派の三性三無性説

吉村 誠

序言

撰論学派は真諦訳の『撰大乘論釈』（以下、『撰大乘論』と略称する）を受容するにあたり、その心識説を如来藏思想に引きつけて解釈する傾向にあった。^① 小稿は、これと同様の傾向が、彼らの三性三無性説の解釈にもみられるかどうかを検証するものである。

撰論学派における三性三無性説の解釈については、従来ほとんど研究されていない。それは、彼らの三性三無性説に関する資料が、まとまった形では残されていないからである。しかし、撰論学派の道奘・道基・靈潤らの三性三無性説に関する議論は、その逸文がわずかに存在する。また、彼らの三性三無性説に対する理解は、円測の『解深密経疏』や道倫の『瑜伽論記』の中で、唯識学派の立場から批判もされている。そこで、これらの資料から撰論学派の三性三無性説を復元し、そこにみられる解釈の特徴について考察することにした。

い。

一、道奘の三性説

初期の撰論学者に青州道蔵寺の道奘がいる。道奘は、道宗（五六二—六二三）や靈潤（一六五〇—）に『撰大乘論』を教示していることから、隋代を中心に活躍した人物であると推定される。^② 道奘の三性説に関する解釈は、『瑜伽論記』の次の記事から窺える。

三性之義、古来大徳種種解釈、乃有多塗。且如〔道〕奘法師、出三性義章、最明為好。彼立三性以三門分別。一情事理門、二塵識理門、三染淨通門。執有人法定性之境名遍計執、因縁之事名依他、無相等理名円成実。是故〔撰大乘〕論云、迷藤執蛇名遍計所執。四塵藤体是依他。藤蛇空理名円成実。第二門中、境名遍計所執、識為依他、無相無生是円成実。是故論主、不取識為遍計所執、取識變異為我等塵、名遍計所執。第三門中、染為遍計所執、淨為円成実、

依他性者即通染淨。故『撰大乘』論云、若縁遍計所執、此識応成染。若縁円成実、此識応成淨。是故染為遍計所執、淨為円成実、能染依他即通染淨。

三性の義は、古来大徳に種種の解釈あれば、乃ち多塗有り。且つ〔道〕契法師の如きは、三性義章を出し、最も明にして好と為す。彼三性を立つに三門を以て分別す。一には情事理門、二には塵識理門、三には染淨通門なり。人法定性の境有りと執するを遍計執と名け、因縁の事を依他と名け、無相等の理を円成実と名く。是の故に『撰大乘』論に云く、藤に迷ひて蛇に執するを遍計所執と名く。四塵の藤の体は是れ依他なり。藤蛇の空理を円成実と名くと。第二門中、境を遍計所執と名け、識を依他と為し、無相・無生は是れ円成実とす。是の故に論主、識を取りて遍計所執と為さず、識の変異を取りて我等の塵と為すを、遍計所執と名く。第三門中、染を遍計所執と為し、淨を円成実と為す。依他性は即ち染淨に通ず。故に『撰大乘』論に云く、若し遍計所執を縁ずれば、此の識は応に染と成るべし。若し円成実を縁ずれば、此の識は応に淨と成るべしと。是の故に染を遍計所執と為し、淨を円成実と為し、能染の依他は即ち染淨に通ずす。

道奘の「三性義章」なる著作には、三性説に関する「情事

理」「塵識理」「染淨通」という三説があげられているという。三性の名称は、真諦訳（分別性・依他性・真实性）ではなく玄奘訳（遍計所執性・依他起性・円成実性）であるが、これは後から変更されたものであろう。「蛇繩麻」の譬喩の「繩」が真諦訳の「藤」であること、また、証文の「論」がすべて『撰大乘論』を指していることなどから、道奘の「三性義章」は真諦訳『撰大乘論』の三性説に対する注疏であったことが推測される。遁倫はこれを撰論学派における三性説の様々な解釈をあげたものとしているが、むしろ道奘が『撰大乘論』の三性説を三つの観点から分類整理したものと理解すべきであろう。

ここでは、依他性と真实性の解釈に注目しておきたい。

道奘は依他性について、「事」（現象）は因縁所生のもので、「識」の変化であり、染淨に「通」じると解釈している。これは、依他性を中心として三性が互換的な関係にあることを説明するものである。特に、第三門の説明には「依他性は即ち染淨に通ず」あるいは「能染の依他は即ち染淨に通ず」とあり、依他性は分別性（染）と真实性（淨）の双方に関係を持つという解釈が明示されている。また、その典拠は『撰大乘論』の「積応知勝相品（以下、相品と略称する）」に求められている。この依他性が分別性と真实性の双方と関係を持つという考え（二分依他説）は、後の撰論学派の解釈にもみられ

るので注意を要する。

一方、真实性については「理」ないし「浄」であると観念されている。第二門の説明によれば、「理」とは「無相・無生は是れ円成実とす」ということであるという。これは、分別性の無相と依他性の無生とが即ち真实性（円成実性）である、という意味である。これも典拠として『撰大乘論』が引用されているが、この考えの直接の典拠となるのは『撰大乘論』の相品にある、次の記述である。

論曰、如取不有故、三性成無性。釈曰、由分別性所顯現、實無所有故、無相性。分別性無體相故。依他無所依止故、無生性。此二無性無無性故、真實無性性。此三無性、但大乘中有、余乘則無。

論に曰く、取るが如く有ならざるが故に、三性は無性を成ず。釈して曰く、分別性の顕現する所は実には有る所無きに由るが故に、無相性なり。分別性は体相無きが故に。依他は依止する所無きが故に、無生性なり。此の二の無性は無無性なるが故に、真實無性性なり。此の三無性は、但だ大乘中のみに有りて、余乗には則ち無し。

即ち、分別の無相性と依他の無生性という二つの無性が、即ち真実の無性性であるという説明である。これは真諦訳のみに存在する三無性説に関する注釈である。道奘の「三性義章」では、この考えが三無性説ではなく三性説の説明に用い

られているので、ここには三性説と三無性説の混同があるといえる。しかし、分別性の無相と依他性の無生とが真实性であるという解釈（境識俱泯説）は、後述するように、撰論学派の三性三無性説を代表する学説となつてゆくのである。

二、道基の三性説

1、道基の三性義

隋末唐初の撰論学者に益州福成寺の道基（五七七—六三七）がいる。道基は『撰大乘論』の講義で名を馳せた人物で、渡天以前の玄奘が師事したことでも知られている。

道基の著作に比定される『撰大乘義章』巻四には三性義があるので、そこから彼の三性説に対する考えを窺うことができる。三性義は七門に分かれるが、そのうち現存しているのは「第一積名」と「第二体性」の二門である。

先ず、「第一積名」では、『撰大乘論』相品の記述に基づいて、三性の異名が分類整理される。そこでは傍証として諸經論の文句が引用され、その一々が会通されている。議論の骨格は次のようである。

①分別性者、此有三名。a 一曰分別性。積有兩義。一虚妄境生虚妄心。説彼境界名分別性。…二能取妄心顛倒分別。説彼妄心名分別性。…中略…b 二名妄想自性。積有兩義。一約妄境能生妄心、名妄想自性。二者妄心顛倒

分別、不称実義故、目妄想自性。…中略…c三名思惟分別。亦有二義。一境界而生思惟、名思惟分別相。二妄心顛倒思惟、此以妄心思惟諸塵故、名思惟分別相。…中略…

②二依他性者、此有兩名。a一名依他性。釈有兩義。一繫屬種子。謂根塵識、現行生起、繫屬本識熏習種子。故曰依他。…中略…二繫屬根塵、名曰依他。謂識現起、依他根塵、方乃得生、名依他性。…中略…b二名緣起自性。一切諸識、依根緣塵、而得生起、名緣起自在。…中略…

③三真實性者、此有三名。a一名真實〔性〕。亦有兩義。一理體不變、二功德無倒。言理體不變者、謂有垢無垢二無所有、不可破壞、名真實性。…中略…『無相論』云、真實性者、謂法如如。即是二性無變異義、名為真實。此乃就體以指其諱。二功德無倒者、道及正教、称理無倒。故名真實。…中略…b二名成自性。…中略…皆是真體、不可破壞、名成自性。c三名第一義性。…中略…斯乃成名、約義以舉其号。第一義者、形對立目。

①分別性は、此れ三名有り。a一には分別性と曰ふ。釈に兩義有り。一には虚妄の境虚妄の心を生ず。彼の境界を説きて分別性と名く。…中略…二には能取の妄心顛倒して分別す。彼の妄心を説きて分別性と名く。…中略…b二には妄想自性と名く。釈に兩義有り。一には妄境の能く妄心を生ずるに約し、妄想自性と名く。二には妄心

顛倒して分別すれば、実義と称せざるが故に、妄想自性と目く。…中略…c三には思惟分別〔相〕と名く。亦た二義有り。一には境界ありて思惟を生ずるを、思惟分別相と名く。二には妄心顛倒して思惟すれば、此れ妄心の諸塵を思惟するを以ての故に、思惟分別相と名く。…中略…

②二に依他性は、此れ兩名有り。a一には依他性と名く。釈に兩義有り。一には種子を繫屬す。謂く根・塵・識、現行生起して、本識の熏習種子に繫屬す。故に依他と曰ふ。…中略…二には根・塵に繫屬するを、名けて依他と曰ふ。謂く識の現起するは、他の根・塵に依りて、方乃ち生ずるを得るを、依他性と名く。…中略…b二には緣起自性と名く。一切諸識、根に依り塵に緣りて、生起するを得るを、緣起自在と名く。…中略…

③三に真實性は、此れ三名有り。a一には真實〔性〕と名く。亦た兩義有り。一には理體不變、二には功德無倒なり。理體不變と言ふは、謂く有垢・無垢の二の無所有の、破壊すべからざるを、真實性と名く。…中略…『無相論』に云く、真實性は、謂く法の如如なりと。即ち是の二性變異の義無きを、名けて真實と為す。此れ乃ち体に就き以て其の諱を指すなり。二の功德無倒とは、道及び正教は、理無倒と称す。故に真實と名く。…中略…b

二には成自性と名く。…中略…皆是れ真体にして、破壊すべからざるを、成自性と名く。c三には第一義性と名く。…中略…斯れ乃ち名を成ずるに、義に約して以て其の号を挙ぐ。第一義とは、形対して目を立つなり。

ここでは、①分別性が「分別性」「妄想自性」「思惟分別(相)」の三名に分けて解釈されている。また、②依他性は「依他性」と「縁起自性」の二名があげられ、心識説の観点から説明されている。「依他性」は現行が種子に熏じ、種子が現行を生じること、「縁起自性」は諸識が現行を生起することであるという。さらに、③真实性が「真実(性)」「成自性」「第一義性」の三名に分けて解釈される。そのうち「真实性」の理体不変の説明には「有垢・無垢の二の無所有の、破壊すべからざるを、真实性と名く」とあるが、これは分別性の無相と依他性の無生が真实性であるという考え(境識俱泯説)に基づく解釈である。その論証として『無相論』の「真实性は、謂く法の如くなり」という一節を引用するところに、道基の独自性がみられる。

次に、「第二体性」では、三性の体性が有為・無為、染・浄の観点から解説されている。

①分別性者体性有二。一者妄塵、二者妄心。言妄塵者六塵境界。從彼妄心似塵而起。体無所有顯現似塵。即說此塵為分別性。…中略…②二并依他。總而說之、但有為色

心為体。別而為論亦有二種。一染濁依他。二清淨依他。亦是世間出世間二果報也。言染濁依他者、三界果報從業煩惱熏習種子生、名為染分。言清淨依他者、無流功德依聞熏習種子生、名為淨分。…中略…③三真实性者、真实性亦有二種。一者有為、二者無為。言有為者道及聖教。道謂二智具生、教謂無等聖教。言無為者、有垢無垢二種真如。…中略…真实性中根塵識者、是仏菩薩報身功德、陰界入法二智種子而生。又是法界所流、証実無倒。譬如真金稱兩等住。此中所說之種十八界、前一凡夫境界、後二聖智境界。復次、前一染分、第二二分、第三唯淨。

①分別性は体性に二有り。一は妄塵、二は妄心なり。妄塵と言ふは六塵の境界なり。彼の妄心に從ひて塵に似て起る。体は無所有なるも顯現すれば塵に似る。即ち此の塵を説きて分別性と為す。…中略…②二に依他を弁ず。總じて之を説かば、但だ有為色心を体と為すのみ。別して論を為せば亦た二種有り。一には染濁依他。二には清淨依他。亦た是れ世間・出世間の二の果報なり。染濁依他と言ふは、三界の果報、業煩惱熏習の種子に從ひて生ずるを、名けて染分と為す。清淨依他と言ふは、無漏功德の聞熏習の種子に依りて生ずるを、名けて淨分と為す。…中略…③三に真实性は、真実の体性も亦た二種有り。一には有為、二には無為なり。有為と言ふは道及び聖教

なり。道は二智の具に生ずるを謂ひ、教は無等の聖教を謂ふ。無為と言ふは、有垢・無垢の二種の真如なり。：中略：真实性の中の根・塵・識は、是れ仏菩薩の報身功德にして、陰界・入法の二智の種子ありて生ず。又是れ法界の流るる所にして、実には無倒なるを証す。譬へば真金の兩等に住むを称するが如し。④此の中に説く所の種の十八界、前の一は凡夫の境界にして、後の二は聖智の境界なり。復た次に、前の一は染分、第二は二分、第三は唯淨なり。

ここでは三性の体性が、①分別性は「妄塵」と「妄心」、②依他性は「有為色心」、③真实性は「有為(道・聖教)」「無為(有垢・無垢二種真如)」であると説明されている。注目すべきは、依他性がさらに「染濁」と「清淨」に二分して説明されているところである。依他性に染分と淨分があり、分別性(染)と真实性(淨)を媒介するという考えは、④で三性が「前の一は染分、第二は二分、第三は唯淨」と説明されているところにも表れている。また、④で分別性が「凡夫の境界」であるのに対し、依他性と真实性は「聖智の境界」であると説明されるのも、依他性の「淨」と関わる側面が考えられてのことであろう。これらの解釈は、依他性が分別性と真实性の双方と関係を持つという考え(二分依他説)に支えられている。これを種子説と連関させ、「業煩惱熏習種子」

が染分を生じ、「聞熏習種子」が淨分を生じると説明するところは、道基独自の解釈であろう。

さらに、真实性を「有為」と「無為」に二分しているところにも、道基の工夫があるように思われる。「有為」は「道及び聖教」であると説明されているが、修行者は「聖教」の「聞熏習」によつて「道」を得るのであるから、これは依他性と連絡していることになる。また、「無為」は「有垢・無垢の二種真如」であると説明されており、仏菩薩の悟りの智慧と、衆生済度のための智慧との二種が考えられている。ここでは、「聖智の境界」である真实性と「凡夫の境界」である分別性との連絡が意図されているようである。

このように、道基は三性に区別を立てる一方で、三者をそれぞれに関連づける緻密な議論を展開していた。その解釈には、三性説によつて『撰大乘論』の所説を整合しようとする態度が窺える。

2、三性同一説

道基が三性説を分析的に解釈した背景には、当時行なわれていた三性を同一視する説への批判があった。

有法師言、三性法体具無寬狹。分別性体通攝有為及与無為。依他真实亦復如是。此義不然。安心妄境可是分別。二空真如、体是無為不可變異。云何亦說是分別性。設復

經論、彼無為爲分別性、蓋是變異之無爲、非真理之無爲也。有爲諸法從因緣所生、是依他。二空無爲、體是常住非因緣生。云何乃說是依他性。

有る法師言く、三性の法体は具に寛狭無し。分別性の体は有爲及び無爲とを通攝す。依他・真實も亦た復た是くの如しと。此の義然らず。妄心・妄境は是を分別すべし。

二空眞如は、体は是れ無爲にして變異すべからず。云何が亦た是れを分別性と説かんや。設し復た經論の、彼の無爲を分別性と爲すは、蓋し是れ變異の無爲にして、真理の無爲に非ざるなり。有爲の諸法は因緣より生ずる所にして、是れ依他なり。二空無爲は、体は是れ常住にして因緣の生に非ず。云何が乃ち是を依他性と説くや。

ここで道基は、ある法師の「三性の法体は無限定なものであり、それぞれが有爲・無爲に通じている」という説をあげた上で、これを明確に否定している。先ず、依他性（染分）である妄心と、分別性である妄境は区別されなければならぬ。次に、真實性は無爲であり變異しないという点で、分別性と区別される。さらに、依他性は有爲の諸法を因緣生起するが、真實性は本性として常住であり因緣所生のものではない。つまり、三性はそれぞれ区別されるべきである、というのが道基の主張である。文中の「二空眞如」と「二空無爲」は、分別性の無相と依他性の無生（二空）によつて真實性（眞如、

無爲）を表現したものであろう。

このような批判が存在するということは、隋末唐初の撰論学派で、三性を無限定に同一視する解釈が現実に行なわれていたことを意味している。道基はこの解釈を認めずに、三性にはあくまでも区別がなければならぬと考えていたのである。

道基が批判した三性を同一視する説は、その根拠が全くないというわけではなかつた。この説の典拠と思われるものは、真諦訳の『転識論』にある次の一節である。

如是如是分別、若分別如是如是類。此類名分別性。此但唯有名、名所顯体実無。此所顯体実無、此分別者因他起故、立名依他性。此前後兩性未曾相離、即是真實性。若相離者、唯識義不成。有境識異故。由不相離故、唯識無境界。無境界故、識亦成無。由境無識無故、立唯識義。是乃成立。是故前性於後性不一不異。

如是に如是に分別すとは、分別して如是に如是にするが若き類なり。此の類を分別性と名く。此れ但唯名有るのみにして、名の顯す所の体は実には無し。此の顯す所の体は実には無しとは、此の分別は他に因りて起るが故に、依他性と名くるを立つ。此の前後兩性の未だ曾て相離れざるが、即ち是れ真實性なり。若し相離るれば、唯識の義成せず。境・識の異有るが故に。相離れざるに由

るが故に、唯識無境の界なり。無境の界なるが故に、識も亦ら無を成ず。境無・識無に由るが故に、唯識の義を立つ。是れ乃ち成立す。是の故に前性は後性に於て不二異なり。

これは三性説を説くものであるが、その真实性の説明に「此の前後両性の未だ曾て相離れざるが、即ち是れ真实性なり」という一節がある。前後両性とは分別性と依他性のことを指しているので、ここには分別性の無相と依他性の無生が真实性であるという考えがあるといえる。後ろに「境無・識無」とあることから、これが境識俱泯説を説明していることは明らかである。

しかし、ここでは分別性と依他性が、無境・唯識の關係にあることを「不相離」といい、実には境無・識無であることに「不二不異」と表現している。もしこの表現だけに注目するならば、分別性と依他性は結局は同一である、という解釈も生まれかねない。そのような見方は、「此の前後両性の未だ曾て相離れざるが、即ち是れ真实性なり」という一節を、単に三性の同一を述べていると解釈することにつながるはずである。

おそらく当時の撰論学派の中には、『転識論』の記述から、境識俱泯説を読み取るのではなく、三性を同一視する説を導き出した者がいたのであろう。それは『撰大乘論』の三性説

を解釈する際にも用いられたが、道基はそれに反対していたのである。

三、円測『解深密経疏』所引の三性三無性説

1、三無性同一説

唐初期の撰論学派では、三性だけではなく、三無性を同一視する解釈も行なわれていた。円測は『解深密経疏』の中で、この三無性を同一視する説を批判的に紹介している。

問、此『解深密』経意、即依三性立三無性。体即三性。何故『三無性論』於一真如立三無性。故『三無性論』第一卷云、約此三性説三無性。由三無性、応知是一無性理。約分別者、由相無性、説名無性。依他起者、由生無性説名無性。真实性者、由真实無性故説無性。具如彼説。

解云、此有兩釈。「真諦三藏云、於一真如遣三性故、説為三種無自性性。於中円成実性、安立諦撰。三無性者、皆非安立。如『三（無）性論』。二大唐三藏云、如『顕揚』等、即依三性立三無性。以此為正。所以者何。世親菩薩『三十唯識』、作此頌言、即依此三性、立彼三無性。故仏密意説、一切法無性。護法釈云、於有及無、総説無性。故名密意。又『顕揚論』無著所造、与『撰大乘』等同顯一義。又『瑜伽論』広引此経、及三無性通有及無。故知、『三無性論』訳家謬也。所以者何。『三十唯識』『三無性論』

世親所造。如何二論有此差別。又被世親、依弥勒宗及無著等。故知、同一無性者、真諦謬耳。或可今勘、真諦『三無性論』、即無著所造『顯揚論』無自性品。然彼真諦詛為別本。須勸目錄及顯揚本末了。

問ふ、此の『解深密』經の意、即ち三性に依りて三無性を立つ。体は即ち三性なり。何故に『三無性論』は一真如に於て三無性を立つるや。故に『三無性論』第一卷に云ふ、此の三性に約して三無性を説く。三無性に由りて、應に是れ一無性の理なるを知るべし。分別に約するとは、相無性に由りて、説きて無性と名く。依他起とは、生無性に由りて説きて無性と名く。真实性とは、真実無性に由るが故に無性を説くと。具さには彼に説くが如し。解して云く、此に両積有り。一には真諦三藏の云く、一真如に於て三性を遣るが故に、説きて三種無自性性と為す。中に於て円成実性は、安立諦の撰なり。三無性は、皆安立に非ざるなり。『三無性論』の如しと。二には大唐三藏の云く、『顯揚』等の如きは、即ち三性に依りて三無性を立つ。此を以て正と為す。所以は何ん。世親菩薩の『三十唯識』、此の頌を作して言く、即ち此の三性に依りて、彼の三無性を立つ。故に仏密意に説く、一切法は無性なりと。護法釈して云く、有及び無に於て、総て無性を説く。故に密意と名くと。又『顯揚論』

は無著の所造にして、『撰大乘』等と同じく一義を顯かにす。又『瑜伽論』は広く此の經を引き、三無性の有及び無に通ずるに及ぼす。故に知る、『三無性論』は詛家の謬なり。所以は何ん。『三十唯識』『三無性論』は世親の所造なり。如何が二論に此の差別有らんや。又被の世親は、弥勒の宗及び無著等に依る。故に知る、同一無性は、真諦の謬りなるのみ。或は今勘すべくんば、真諦『三無性論』は、即ち無著所造の『顯揚論』の無自性品なり。然らば彼の真諦詛は別本為らん。須らく目錄及び顯揚を勘すべき也。未だ了せず。

これによれば、唐初期の撰論学派では、真諦の説として「一真如に於て三性を遣る」ということが即ち三無性である、という解釈が流布していたようである。この解釈の根拠となつたのは、問いに引用されている真諦詛の『三無性論』の記述である。そこには「三無性に由りて、應に是れ一無性の理なるを知るべし」とあり、三無性によつて三性がすべて無性であることを知る、ということが説かれてゐる。つまり、三つの無性というが、分別性の相無性も、依他性の生無性も、真实性の真実無性も、全ては無性という一つの真理であり、その一つの真如によつて三性を離れる、という考えである。これが「一真如に於て三性を遣る」という意味であろう。

しかし、玄奘は『顯揚聖教論』などの所説に基づいて、三性によつて三無性を立てるのを正説とした。円測は、それを

『唯識三十頌』等の新訳を引いて論証し、同じ世親の著作で『唯識三十頌』と『三無性論』の三無性説が異なるのは疑問であるとし、真諦の『三無性論』は誤訳があるか、あるいは新訳とは別本ではないかと推測している。もちろん、三無性は全て無性という同一の真如である、という解釈が真諦によつて唱えられたという証拠はない。おそらくは撰論学派の中に、真諦訳の『三無性論』からそのような説を導き出した者がいたのであろう。それは唐初期には真諦の説として定着し、円測の批判の対象となるほど流行していたのである。

2、三性説と心識説の連関

円測は『解深密経疏』の中で、三無性を同一視する説のほかにも、撰論学派の三性説に関するいくつかの解釈をあげて、これに批判を加えている。その一つに、撰論学派が三性説と心識説を連関させていたことに対する批判がある。それは次のようである。

然此三相体性寛狭、諸説不同。①且依真諦三藏説云、第八頼耶名依他起、眼等七識為分別性、依他無生分別無相為真実性。②又解、眼等八識為依他起、所変相分為分別性、依他無生分別無相為真実性。③又解、眼等八識見分相分名依他起、妄所執境為分別性、依他無生分別無相為真実性。④如上兩解、理且不然。眼等八識及諸相分等從

縁生。云何偏説、第八頼耶名依他起、眼等七識為分別性。分別無相依他無生不異二性、如何説彼名真実性。如此等過不可具陳。已外諸説恐繁不叙。

然るに此の三相の体性の寛狭、諸説同じからず。①且つ真諦三藏の説に依りて云く、第八頼耶を依他起と名け、眼等七識を分別性と為す。依他の無生と分別の無相とを真実性と為すと。②又た解す、眼等の八識を依他起と無し、所変の相分を分別性と為す。依他の無生と分別の無相とを真実性と為すと。③又た解す、眼等の八識たる見分と相分とを依他起と名け、妄りに執る所の境を分別性と為す。依他の無生と分別の無相とを真実性となすと。④上の如き兩解、理且に然らず。眼等の八識及び諸の相分等は縁生による。云何が偏へに説きて、第八頼耶を依他起と名け、眼等の七識を分別性と為さんと。分別の無相と依他の無生とは二性に異ならざるも、如何が彼を説きて真実性と名くるや。此くの如き等の過は具さには陳ぶるべからず。已外の諸説は繁を恐れて叙べず。

即ち、撰論学派の三性説に関する学説の一つに、①第八阿頼耶識(新訳は阿頼耶識)は依他性であり、第七識と前六識は分別性であり、依他性の無生と分別性の無相とが真実性である、という解釈があつたという。これは真諦の説として行なわれ、これに基づいて複数の解釈が立てられていた。②第

一の解釈は、八識すべて（見分）を依他性とし、相分を分別性とみるもの。③第二の解釈は、見分と相分を依他性とし、虚妄分別された対象のみを分別性とみるものである。しかし、④円測はこの二つの解釈を道理に合わないものとして退ける。即ち、八識（見分）や相分は因縁生起するものであり、その意味ではすべて依他性に因わるものである。したがって、第八阿梨耶識が依他性で、第七識と前六識が分別性であると言うことはできない。また、依他性の無生と分別性の無相という二つの無性は異なるものではないが、だからといって、どうしてそれが即ち真实性であると言えるだろうか、と。

円測はここで、依他性の無生と分別性の無相とが真实性であるという、撰論学派の境識俱泯説を明確に否定している。しかし、ここで注目したいのは、撰論学派では三性説と心識説を連関して理解していたという指摘の方である。この解釈の基本は①の説であり、そこでは依他性が第八阿梨耶識に、分別性が第七識と前六識に当てはめられている。これが円測の伝聞したように真諦の説であるという保証はない。しかし、先にみた道基の解釈では、依他性が阿頼耶識縁起によつて説明されていた。また、道倫の『瑜伽論記』には、撰論学派の三性説の解釈に「阿頼耶識は是れ依他性なり」という説があったということが記されている（後述）。これらは、依他性を阿頼耶識に当てること、撰論学派で一般に行なわれていた

という事実を示すものである。ただし、残りの識を分別性と依他性のどちらに配当するか、依他性に配当した場合分別性には何を当てるかという点で意見が分かれ、②③のような異説が立てられたものと思われる。

このような思考を進めるならば、撰論学派では九識説が流行したのであるから、真实性に第九阿摩羅識を当てはめる解釈が生まれるのは当然のことである。それを支持する論理は、既に真諦訳の『無相論』によつて与えられていた。凝然の『華嚴孔目章発悟記』に引用される、道基の『撰大乘論義章』の逸文には次のようにある。

『無相論』中転識品云、能縁有三。一果報識。即黎耶。二者執識。即阿陀那。三者塵識。即是六識。如是説已、復説阿摩羅識。故彼論云、境識俱泯即是実性。其実性者即阿摩羅識也。

『無相論』中の転識品に云ふ、能縁に三有り。一には果報識。即ち黎耶なり。二には執識。即ち阿陀那なり。三には塵識。即ち是れ六識なりと。是の如く説き已り、復た阿摩羅識を説く。故に彼の論に云く、境識俱泯は即ち是れ実性なり。其の実性とは即ち阿摩羅識なりと。

道基は『無相論』（真諦訳の『転識論』『顕識論』『三無性論』の総称）には通常の六識、第七阿陀那識、第八阿梨耶識の他に、第九阿摩羅識が説かれているとして、その証拠に『転識論』

の「境識俱泯即是実性。実証即是阿摩羅識（境識俱泯は即ち是れ実性なり。実証とは即ち是れ阿摩羅識なり）」という一節を引いている。「境識俱泯」とは「依他の無生と分別の無相」のことに他ならないので、これは円測の批判した「分別の無相と依他の無生とを真实性と為す」と同じ考えであるといえる。この両者をあわせると、「阿摩羅識」は「真实性」である、という解釈を容易に導き出すことができる。道基は九識説の支持者であったため、真实性を阿摩羅識に当てることも認めていたのではないかと思われる。

このような考えは『三無性論』の一節によっても支持されていた。そのことは、敦煌本の『撰大乘論章』の中に確認することができる。

『無相論』無相品云、分別性永無、依他性亦不有。此二無所有、即是阿摩羅識。故究竟唯一淨識也。¹⁵

『無相論』無相品に云く、分別性は永に無にして、依他性も亦た有らず。此の二の無所有は、即ち是れ阿摩羅識なりと。故に究竟唯一の淨識なり。

ここでは、『三無性論』の「由分別性永無故、依他性亦不有。此二無所有、即是阿摩羅識（分別性は永に無なるに由るが故に、依他性も亦た有らず。此の二の無所有は、即ち是れ阿摩羅識なり）」という一節が引用され、やはり分別性の無相と依他性の無生、即ち境識俱泯が、阿摩羅識であることが説明

されている。

このように、真諦訳の『転識論』や『三無性論』の記述は、真实性と阿摩羅識をつなげる論理を提供していた。撰論学派ではそれらの論書の流行を受けて九識説を發達させているので、三性説と心識説との関係も真实性と阿摩羅識の連関にまで及んでいたのではないかと推測される。

四、靈潤の三無性説

1、靈潤の二重観

唐初期の撰論学者に京師弘福寺の靈潤（一六五〇—）がいる。道奘に『撰大乘論』を学び、『涅槃経』の第一人者として高名な人物で、玄奘の訳場で『瑜伽師地論』等の証義も務めている。靈潤の三無性説は、『統高僧伝』の記事にその一端を窺うことができる。

前略…及資糧章中、衆師並謂有三重観。無相無生及無性性也。〔靈〕潤揣文尋旨無第三重也。故論文上下惟有兩重。捨得如文。第一前七処捨外塵邪取、得意言分別、第八処内捨唯識想、得真法界。前観無相捨外塵想、後観無生捨唯識想、第二刹那即入初地。故無第三。笠約三性説三無性、観扱遺執惟有兩重。¹⁶

前略…資糧章の中に及べば、衆師並に三重観有りと謂ふ。無相・無生及び無性性なり。〔靈〕潤は文を揣り旨を尋

ね第三重無しとす。故に論文の上下には惟だ両重のみ有りとす。捨得は文の如し。第一に前の七処に外塵の邪取を捨て、意言分別を得、第八処に内に唯識想を捨て、真法界を得。前に無相を觀して外に塵想を捨て、後に無生を觀じて唯識想を捨つれば、第二刹那には即ち初地に入る。故に第三無し。三性に簽約して三無性を説くも、觀は執を遣るに捩らば、惟だ両重有るのみ。

即ち、『撰大乘論』釈応知入勝相品(以下、入相品と略称する)に説かれるに唯識觀に關して、多くの学者は無相・無生・無性性の三重觀により三性へ悟入するとしたが、靈潤は次のような二重觀を説いたという。まず七処(三品練磨心・滅除四處障・緣法及義為境・四種尋思・四種如実智)に無相を觀じて外塵を捨て、ついで八処(唯量・相見・種種相貌)に無生を觀じて唯識想をも捨てるならば、次の刹那には初地に入る。故に、三無性といつても觀法としては二觀だけである。つまり、分別性と依他性を捨てることが即ち真实性に入ること(無性性)であり、それは唯識觀でいへば無相と無生の二觀を得ることであるから、第三の觀はあり得ない、という解釈である。

靈潤のいう三無性の二重觀は、分別性の無相と依他性の無生とが即ち真实性であるとした、道奘の三性説(境識俱泯説)の構造を継承するものである。靈潤は道奘に師事しているた

め、三性三無性の解釈について師説を継承したともいえるだろう。また、般舟三昧の実践者でもあった靈潤が、道奘の説を唯識觀において発展させたということも考えられよう。しかし、ここで問題としたのは二重觀と三重觀の解釈の相違ではない。より大きな問題は、ここに分別性と依他性の捨棄が説かれていることにある。この考えは、靈潤たちが唯識觀の根拠とした、『撰大乘論』入相品の記述から導き出されたものである。

菩薩、見名義更互為客、入異名義分別性。若菩薩、見名自性仮説差別仮説唯分別為體、得入分別無相性。若菩薩、但見乱識無六種相、此乱識體不成故不可説、因緣不成故不可執有生起。此中分別既無、言説亦不可得、則入依他無生性。若菩薩、見此二義有無無所有、則入三無性非安立諦。²⁰⁾

菩薩、名義の更互に客と為るを見れば、異の名義の分別性に入る。若し菩薩、名と自性の仮説と差別の仮説とは唯だ分別を體と為すを見れば、分別の無相性に入るを得。若し菩薩、但だ乱識は六種の相無しと見れば、此の乱識の體は成ぜざるが故に説くべからず、因緣成ぜざるが故に生起有りと執すべからず。此の中に分別既に無く、言説も亦た得べからざれば、則ち依他の無生性に入る。若し菩薩、此の二義の有無無所有なりと見れば、則ち三

無性の非安立諦に入る。

即ち、分別性を無相と観じ、依他性を無生と観じ、両者ともに無所有と観じることが三無性に入ることであるという。靈潤たちはこの両者を無所有と観じることを、両者を捨てることと理解したようである。その過程を三段階とみるのが三重観、二段階とみるのが二重観であるが、いずれも分別性と依他性をともに捨遣するという点では同じである。

ここで注目したいのは、『撰大乘論』入相品の依他性についての説明である。依他性は「乱識」として分別相の根源とされ、その「体」は実には得られないので言語で表象できず、「因縁」も成立しないので何も生起しない、と説明される。ここには、依他性は分別相を生じることが実には無性である、という説明があるばかりで、依他性と真实性の關係については何の言及もみられない。このように『撰大乘論』入相品の三性説の説明では、相品の説明に比べて、真实性ないし無性性の超越性だけが際立つようになっている。この入相品の注釈は真諦訳のみに存在し、玄奘訳等にはみることのできない部分である。

この真諦独自の注釈が、唯識観の典拠として唐初期の撰論師の間で重視されるようになったのは、これと同様の記述が、やはり真諦訳の『三無性論』に「真实性者謂法如如。法者即是分別依他両性。如如者即是両性無所有（真实性とは謂く法

の如如なり。法とは即ち是れ分別・依他の両性なり。如如とは即ち是の両性の無所有なり（²¹）」というかたちで見出されたからであろう。唐初期の撰論師はこの『三無性論』の説と共通する『撰大乘論』入相品の記述に注目するようになった。その結果、以前にはそれほど主張されていなかった依他性を捨遣するという考えが表面化したのではないかと思われる。

2、依他性の捨遣

ところが、玄奘のもたらした新訳の唯識説では、三無性説の解釈において依他起性を捨遣することはなかった。靈潤が、新訳の三無性説は「但遣分別、不遣依他（但だ分別を遣るのみにして、依他を遣らず）」²²という疑義を呈したのはこのためである。靈潤の言葉を裏付けるように、玄奘門下の人々は、依他起性を捨遣する解釈をはっきりと否定している。円測の『解深密経疏』には次のようにある。

- ① 依他起相上遍計所執相、無執以為縁故、円成実相而可了知。② 釈曰、此釈円成実。謂於依他起上無所執相、以顯真実。故言無執。故「瑜伽」七十三云、…中略…此文不依遣所執相顯円成実。…中略…③ 有云、無執者、無能執依他及所執分別。故言無執。故「仏性論」云、問曰、真实性縁何因得成。答曰、由分別依他極無所有故得顯現。²³
- ④ 解云、訳家謬也。遣依他起、違自所宗「瑜伽」等故。

①依他起相上の遍計所執相は、執無きを以て縁と為すが故に、円成実相ありて了知すべし。②積して曰く、此れ円成実を積す。謂く依他起上に於て所執相無きを、以て真実を顯はす。故に無執と言ふ。故に『瑜伽』七十三に云ふ、…中略…此の文所執相を遣るに依りて円成実を顯はすにはあらず。…中略…③有るひと云ふ、無執とは、能執の依他及び所執の分別無きなり。故に無執と言ふ。故に『仏性論』に云く、問ひて曰く、真実性の縁は何の因にて成ずるを得るや。答へて曰く、分別・依他の無所有を極むるに由るが故に顯現するを得と。④解して云ふ、誤家の謬りなり。依他起を遣るは、自ら宗とする所の『瑜伽』等に違ふが故に。

円測は①『解深密經』の円成実性に関する本文をあげ、②依他起性のうち遍計所執性のないことが円成実性であると注釈し、『瑜伽師地論』を引いてその証拠としている。ところが、③ある人は真諦訳の『仏性論』に基づいて、分別性と依他性の無所有が真実性である、と主張している。これは先にみた靈潤の解釈や『撰大乘論』入相品、『三無性論』の説明と同じである。④これに対して円測は、真諦の誤訳であり、依他起性を捨棄するのは『瑜伽師地論』等に反するとして批判している。『解深密經疏』には同様の批判が他にもある。

復次勝義生、非由有情界中諸有情類別觀遍計所執為自性

撰論学派の三性三無性説（吉村）

故、亦非由彼別觀依他起自性及円成実自性為自性故、我立三種無自性性。釈曰：中略…此中意云、謂諸有情非由別觀三種自性、如其次第遣三性故立三無性。所以者何。非唯相無自性性遣遍計所執、余二亦遣所執性故。不遣依他及円成実、立後二種無自性性。依他円成不可遣故。

復た次に勝義生よ、有情界中の諸の有情の類遍計所執を別觀して自性と為すに由るに非ざるが故に、亦た彼依他起自性及び円成実自性を別觀して自性と為すに由るに非ざるが故に、我三種無自性性を立つ。積して曰く：中略…此の中の意を云ふに、諸有情三種自性を別觀するに由りて、其の次第の如く三性を遣るが故に三無性を立つには非ずと謂ふ。所以は何ん。唯だ相無自性性の遍計所執を遣るのみには非ず、余の二も亦た所執性を遣るが故に。依他及び円成実を遣らずして、後の二種の無自性を立る。依他・円成は遣るべからざるが故に。

ここでは『解深密經』の三無性説に関する本文に注釈して、三性をそれぞれ別のものと観るからといって、三無性はそれらを順次に捨遣するわけではない、と述べている。遍計所執性はただ相無性によつて捨遣されるだけではなく、生無性・勝義無性によつても捨遣される。即ち三無性とは総じて遍計所執性を捨遣することであり、生無性・勝義無性は依他起性・円成実性を捨遣するのではない、というのがその理由

である。新訳の三無性説では、遍計所執性のない依他起性のことを円成実性であるとする。円測が最後に断言しているように、依他起性と円成実性は捨遣されないのである。

また、道倫は『瑜伽論記』の中で次のように述べている。

①又古漢師云、依他無性者、無衆縁生俗諦性故、名依他無性者、不然。②『瑜伽論』云、云何無自性性。謂一切行、衆縁生縁力有、非自然有。是故説生無自性性。此意説言、衆縁生法、無自然性、故説生無自性為其性。非謂無因縁生性、故説生無自性性。若言無衆縁生性故説無自性性者、便是惡取空也。故『瑜伽論』七十五卷云：中略：③無著菩薩造『撰大乘』正述此宗。故論云、若依他性円成実性亦無、即恒無二品及染浄法。清浄言染汚者是顛倒。事依他也、自古撰大乘師謬解本宗。故説遣依他因縁法得無生性。乃至是清弁菩薩學徒惡取空宗、非慈氏菩薩及無著菩薩所學宗也。

①又古の漢師、依他無性は、衆縁を生ずる俗諦の性無きが故に、依他無性と名くると云ふは、然らず。②『瑜伽論』に云ふ、云何が無自性性。謂く一切行は、衆縁を生ずる縁力の有にして、自然の有に非ず。是の故に生無自性性と説くと。此の意を説きて言く、衆縁を生ずるの法は、自然の性無きが故に、生無自性と説きて其の性と為す。因縁を生ずる性無きが故に生無自性と説くと謂ふには

非ず。若し衆縁を生ずる性無きが故に無自性と説くと言はば、便ち是れ惡取空なり。故に『瑜伽論』七十五卷に云ふ：中略：③無著菩薩の造る『撰大乘』は正に此の宗を述ぶ。故の論に云ふ、若し依他性・円成実性も亦た無ならば、即ち恒に二品及び染浄の法無からんと。清浄を染汚と言ふは是れ顛倒なり。依他を事とするや、古へより撰大乘師本宗を謬解す。故に依他因縁の法を遣りて無生性と説く。乃至は是れ清弁菩薩の學徒の惡取空宗にして、慈氏菩薩及び無著菩薩の學ぶ所の宗には非ざるなり。

ここで道倫は、①「古の漢師」は依他性の無生を、因縁生起の無であると理解していた、と述べている。「古の漢師」とは後に「撰大乘師」とあるように、撰論師のことを指している。道倫は撰論師の解釈を、次のように批判してゆく。②『瑜伽師地論』に説かれるように、生無自性性とは因縁生起そのものを意味している。それを因縁生起の無とみるのは惡取空である。その証拠は『瑜伽師地論』の他の箇所にもみられるが、③『撰大乘論』の趣旨も同じであり、依他起性と円成実性がなければ諸法は成り立たないと書かれている。それを撰論師は、依他性を捨遣することが無生性であると誤解してきたのである。これは清弁の徒が惡取空に陥ったのと等しく、弥勒・無著の宗旨ではない、と。

円測や道倫の証言は、唐初期の撰論学派において、依他性の捨遣が無生性であるという解釈が広く行なわれていたことを示している。この三無性説の解釈が流行したことが、二重観や三重観といった唯識観の議論を促したのである。このように、分別性の無相と依他性の無生とが真実性であるという解釈（境識俱泯説）は、撰論学派の後期に至り、依他性を積極的に捨遣するという解釈へと発展した。ここでは、依他性が分別性と真実性の双方に通じるという解釈（二分依他説）は、殆ど考慮されていないかのようにみえる。

五、道倫『瑜伽論記』所引の三性説

撰論学派の三性三無性説は、道奘の時代には『撰大乘論』の記述を中心に研究されていたが、道基や靈潤の時代になると他の真諦訳の論書が流行したことを受け、それらの説を『撰大乘論』の中に読み込むという態度で研究されるようになった。道倫は先の引用で「三性の義、古来大徳に種種の解釈ありて、乃ち多塗有り」と述べていたが、三性三無性説についての諸説が主張されるようになったのは、『撰大乘論』を他の真諦訳の論書と詳細に比較し始めた唐初期のことであっただろう。その頃に行なわれたさまざまな解釈については、『瑜伽論記』に引用される文備の言葉から知ることができる。

〔文〕備云、凡弁三性経論不同。且略分別作九門解。

撰論学派の三性三無性説（吉村）

① 一名義淨門。如『中辺論』説。諸法名者是分別性、唯由義執名為実所。目法者是依他性、四種清淨是真実性。

② 二義名淨門。如『撰大乘論』説。所目義是分別性。謂依名執名下義為実。能目名是依他性。故論云、顯名是依他、顯義是分別。四種清淨是真実性。

③ 三塵識〔理〕門。如『楞伽經』説。五法藏中相名二種名分別性、妄想一種名依他性、正智如如名真実性。

④ 四情事理門。如『仏性論』説。分別性者於五事中不撰。以情計有而無事体故。相名分別正智四法名依他、真如一法名真実性。

⑤ 五末本淨門。如『撰大乘論』説。一切染法是分別性、阿頼耶識是依他性、四種清淨是真実性。

⑥ 六情染淨門。如『撰大乘論』中引『毘仏略經』説。如偈云、幻等顯依他、説無顯分別、説四種清淨、当知是真実。

⑦ 七染通淨門。如『撰大乘論』中引『阿毘達磨經』。如金藏土等喻。

⑧ 八諦理通門。如『中辺論』及『涅槃經』説。四諦皆通三性。

⑨ 九通別相門。如『三無性論』及『顯揚論』説。能言所言相名通三性。能言所言撰屬性是遍計所執性、執着相是依他起性、無執着相是真実。

⑩ 今依此〔瑜伽〕論、就第四情事理門、將五事撰於三性。『成唯識論』亦存此門、顯無雜乱。依門釈中、総挙如文。

〔文〕備云く、凡そ三性を弁するに経論同じからず。且略して分別すれば九門の解を作す。

①一には名義浄門。『中辺論』に説くが如し。諸法の名は是れ分別性、唯だ義に由りて名に執し実所と為す。法を目するは是れ依他性、四種清浄は是れ真实性なり。

②二には義名浄門。『撰大乘論』に説くが如し。目する所の義は是れ分別性なり。名に依りて名に執し下義を実と為すを謂ふ。能く目するを是れ依他性と名く。故に論に云く、名を顕はすは是れ依他、義を顕はすは是れ分別なりと。四種清浄は是れ真实性なり。

③三には塵識〔理〕門。『楞伽經』に説くが如し。五法藏中の相名の二種を分別性と名け、妄想の一種を依他性と名け、正智如如を真实性と名く。

④四には情事理門。『仏性論』に説くが如し。分別性は五事中に於て撰せず。情を以て有を計するも事体無きが故に。相名の分別と正智の四法とを依他と名け、真如の一法を真实性と名く。

⑤五には末本浄門。『撰大乘論』に説くが如し。一切の染法は是れ分別性、阿頼耶識は是れ依他性、四種清浄は是れ真实性なり。

⑥六には情染浄門。『撰大乘論』中に引く『毘仏略經』に説くが如し。偈に云ふが如く、幻等は依他を顕はし、

無を説くは分別を顕はし、四種清浄を説くは、当に知るべし是れ真實なりと。

⑦七には染通浄門。『撰大乘論』中に引く『阿毘達磨經』の如し。金藏土等の喩の如し。

⑧八には諦理通門。『中辺論』及び『涅槃經』に説くが如し。四諦皆な三性に通ず。

⑨九通別相門。『三無性論』及び『顕揚論』に説くが如し。能言・所言の相名は三性に通ず。能言・所言の撰属の性は是れ遍計所執性、執着相は是れ依他起性、無執着相は是れ真實なり。

⑩今此の『〔瑜伽〕論』に依らば、第四の情事理門に就き、五事を將て三性を撰す。『成唯識論』も亦た此門に存りて、乱雑無きを顕はす。門に依る釈の中、総拳は文の如し。

文備は唐初期に唱えられていた三性説の解釈を、九つに分類整理した。そのうちの四つまでが『撰大乘論』を典拠としているというが、これは必ずしも厳密なものとするべきではない。『塵識理』や『情事理』などは、道装がそうしたように『撰大乘論』に基づいて解釈することも可能であり、その反対に、『撰大乘論』に他の経論に説かれた三性説を読み込むこともまた可能だからである。

ここでは、これらの解釈のうち、依他性の表現に注目する

ことにしたい。

依他性は、①では「義」、②では「名」とされている。①と②では用法が反対であるが、いずれにせよ「義」と「名」による解釈は、依他性と分別性によって生起する執着の構造を表そうとするものである。したがって、①も②も真实性の「浄」が際立つ結果となっている。また、⑤の「本」は分別性の「末」との対であり、依他性が虚妄分別の根源であることを示す観念である。⑥の「染」は真实性の「浄」との対であるが、やはり虚妄分別の根拠としての依他性をいうものである。したがって、⑤と⑥もやはり真实性の「浄」との関係は隔絶しているといえる。

これに対し、③の「識」と④の「事」という解釈は、依他性と分別性が対になることはなく、価値として中立であるようにみえる。特に④「事」は、真实性の「理」と対になっているが、解説には「相名の分別と正智の四法を依他と名く」とあり、依他性には分別性と真实性への双方向性が認められていることが分かる。この点を積極的に表現すると、⑦の染浄を媒介する「通」という解釈になるのであろう。

しかし、⑧と⑨の「通」は依他性の双方向性を意味するものではない。⑧では四諦などの理が三性に共通していることを「通」といい、⑨では言語表象という点では三性が共通することを「通」というようである。両者の意味は異なるが、

どちらの説の背後にも、三性ないし三無性を同一視する思考が働いているといえるだろう。

最後に文備は、新訳の唯識説によれば、④の「情事理」が正説であると述べている。依他起性は遍計所執性の生起に関わるが、その関わりがなくなれば円成実性と等しいからである。しかし、文備のあげた諸説をみると、唐初期の撰論学派では二分依他説は少数派であり、それが時代を経るにつれてあまり振るわなくなったことが窺える。

道奘の解釈では、依他性は「事」「識」「通」と表現されていた。そのうちの「通」は「依他性は即ち染浄に通ず」と説明され、依他性の双方向性が考えられていた。その一方で、真实性については「無相・無生は是れ円成実なり」として、分別性の無相と依他性の無生とが真实性であるという考えも示されていた。この二つの解釈は、道基の場合にはどちらも存在したが、靈潤の場合には、後者が発展した依他性を捨遣するという解釈が重視されていた。そして、文備の分類では後者の解釈が大多数を占めるようになっていく。このような変化が起きたのは、隋末唐初に『三無性論』や『転識論』が流行し、その所説が『撰大乘論』に読み込まれたことが、境識俱泯説に有利に働いたからであろう。また、そのような状況で新たに行なわれるようになったのが、三性や三無性を同一視する説であった。これに関連すると思われる解釈が、文備の分類

で最後の方に置かれているのは、それが比較的新しい説だったからではなからうか。

結語

撰論学派における三性三無性説の解釈は、始めは真諦訳の『撰大乘論』相品の記述を整理分析することが中心であった。ここでは、依他性が分別性と真实性の双方と関係を持つという解釈（二分依他説）や、分別性の無相と依他性の無生とが真实性であるという解釈（境識俱泯説）が行なわれていたようである。後者は真諦独自の注釈に基づく解釈である。

隋末唐初、同じ真諦訳の『三無性論』等が流布するようになると、その所説と共通性を持つ『撰大乘論』入相品の注釈が重視されるようになり、分別性とともにより依他性を捨遣するという解釈が有力になった。入相品の注釈もまた真諦独自のものである。依他性を積極的に捨遣するという解釈は、境識俱泯説の発展したものであるが、その解釈の流行は、依他性を染浄の双方に通じるとみる二分依他説の流行を抑制したものである。

また、真諦訳の論書の流行によって、新たに三性や三無性を同一視する解釈も行なわれるようになった。三性や三無性を同一視する説は、『撰大乘論』から直接導き出すことは困難である。しかし、隋末唐初の撰論学派では、『三無性論』や『転

識論』の諸学説を援用し、『撰大乘論』の中に三性や三無性を同一視する説を読み込んでいったのである。

さらに撰論学派では、依他性の因縁生起と阿梨耶識縁起とを同質のものとして、心識説と三性説を連関する解釈もなっていた。この解釈は依他性と第八阿梨耶識の連関を基本とするものであるが、これも真諦訳の論書の流行を受けて、真实性と第九阿摩羅識の連関まで意図されるようになったと考えられる。

撰論学派の三性三無性説の展開を、彼らの心識説の展開と比較すると、両者の間には興味深い並行関係が認められる。二分依他説は、撰論学派の八識説が阿梨耶識を真妄和合識とみることに、境識俱泯説は、九識説が第八阿梨耶識を妄識とみて第九阿摩羅識を真識とすることに、それぞれ対応しているようにみえる。このことは、撰論学派の三性三無性説の解釈も、心識説と同様に如来藏思想を背景として理解されていたことを示唆するものである。

また、八識説と九識説は撰論学派を通じて行なわれていたが、真諦訳の論書の流行を受けて九識説の方が有力になった。この経緯も、三性三無性説の解釈で境識俱泯説の方が次第に有力になった事情とよく似ているといえる。このように考えると、撰論学派の三性三無性説と心識説の展開は、如来藏思想を通じて連動していたと見てよいであろう。この問題は、

さらに修道論や仏身論との対応関係も視野に入れて考察する必要があるが、それは今後の課題とすることにした。

註

- (1) 撰論学派の心識説については、拙稿「撰論学派の心識説について」(『駒澤大学仏教学部論集』三四、二〇〇三年)、「真諦の阿摩羅識説と撰論学派の九識説」(『印度学仏教学研究』五六―一、二〇〇七年) 参照。
- (2) 『統高僧伝』卷十一 道宗伝、大正五〇、五一二 a。卷十五 靈潤伝、大正五〇、五四五 c。道契については、勝又俊教「仏教における心識説の研究」(山喜房佛書林、一九六一年) 七八〇―七八三頁参照。
- (3) 『瑜伽論記』卷十九下、大正四二、七五八 c―七五九 a。宇井伯寿「印度哲学研究第六」(甲子社書房、一九三〇年) 二九八頁参照。
- (4) 『撰大乘論釈』卷六、大正三二、一九四 a。
- (5) 真諦訳「撰大乘論」のみに見られる注釈については、岩田諦静「初期唯識思想研究」(大東出版社、一九八一年) 参照。
- (6) 「撰大乘義章」卷四が道基の著作と推定されることは、勝又前掲書七九六―七九七頁参照。
- (7) 『撰大乘義章』大正八五、一〇四四 a―b。
- (8) 『撰大乘義章』大正八五、一〇四四 c―一〇四六 a。「無漏功德」、文脈より「無漏功德」に改める。
- (9) ただし、このような解釈の原型はすでに浄影寺慧遠の『大乘義章』の中に見ることができる。撰論学派の間重習説については、拙稿「中国唯識における間重習説について」(『印度学

撰論学派の三性三無性説(吉村)

- 仏教学研究』五八、掲載予定) 参照。
- (10) 『撰大乘義章』大正八五、一〇四四 c。
- (11) 『転識論』大正三一、六三 a。「因他故起」、文脈より「因他起故」に改める。
- (12) 『解深密經疏』卷四、卅統一―三三―三八二左上―三八三右上。
- (13) 『三無性論』大正三一、八六七 c。
- (14) 『解深密經疏』卷四、卅統一―三四―三三四左上左下。
- (15) 『華嚴孔目章發悟記』卷十五、日仏全一二三、三七〇。
- (16) 『転識論』大正三一、六二 c。
- (17) 敦煌本「撰大乘論章」卷一、262a、大正八五、一〇二六 c。
- (18) 『三無性論』卷上、大正三一、八七二 a。
- (19) 『統高僧伝』卷十五 靈潤伝、大正五〇、五四六 c―五四七 a。
- (20) 『撰大乘論釈』卷八、大正三二、二二一 a。
- (21) 『三無性論』卷上、大正三二、八六七 b。
- (22) 『法華集句』卷中、伝全三、一五四。
- (23) 『解深密經疏』卷四、卅統一―三四―三七七左上―左下。同三八五右下にも同様の批判がある。
- (24) 『解深密經疏』卷四、卅統一―三四―三八五右下。
- (25) 『瑜伽論記』卷十九下、大正四二、七五六 c―七五七 b。
- (26) 『瑜伽論記』卷十九下、大正四二、七五九 a―b。